

\*\*\*\*\*ここから『電子耕』\*\*\*\*\*

隔週刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』 第111号

-健康・農業・食・図書・人物情報・高齢者と若者の交流誌-

<http://nazuna.com/tom/>

2003.6.12(木)発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

\*\*\*\*\*発行部数 1817 部\*\*\*\*\*

<キーワード>

健康・食べ物・農林園芸・図書を中心とした雑学情報を提供し、庶民の歴史も残す。高齢者と若者の交流ミニコミ誌。お互いに情報を交流しましょう。

★

★毎日新聞 紀平重成記者 「アジア見聞録」>「銀幕閑話」好評連載中

<http://www.mainichi.co.jp/asia/goraku/cinema/>

#バックナンバー

<http://www.mainichi.co.jp/asia/goraku/cinema/2003/backnumber1.html>

★

□ 目次 □-----

<読者の声>

赤堀さんから、1、2、3。丹羽さんから、レモングラスさんから、  
大山さんから、栗田さんから、高橋さんから、長谷川さんから、斎藤さんから

<舌耕のネタ>「北朝鮮の工作船と食料自給を考える」

<元気な農業・元気なくらし・5私にもできた「十割そば」 栗田庄一

<農文協図書館から>高橋富弥さんの業績を讃える 原田勉

<丹羽敏明の戦争体験>11、クルアンの検問からシンガポールへ

<日本たまご事情>「ホトトギスが鳴く」愛鶏園・斎藤富士雄

<森 清の読後感>女性と仕事4、松岡やより「愛と怒り 闘う勇氣」

岩波書店、2003年4月刊、1800円+税

<私の近況報告>5月28日～6月10日(中国SARS支援)

<読者の声>(お断り:最近視力が極端に落ちました。そのため従来メールがきたらすぐ返信していましたが、それが出来なくなりました。今後メルマガ『電子耕』だけで返信・コメントいたしますので、ご承知ください)

<読者の声>

●5/29 赤堀さんから1:88歳で代かきしている元気なお爺さんの紹介です。

電子耕を読み始めて2年くらいになる読者の赤堀です。

横浜の戸塚に住んでいる56歳のサラリーマンですが、20年位前から田んぼを借りて仲間（10名位）と米作りをしています。機械を全く使わず、農薬も使わず、堆肥と牛糞だけです。150坪前後の広さの田んぼですので、何とか人手だけでやってゆけます。

今年も田んぼの代かきを2週間前にしました。その時に参加した仲間の一人、村上さんが今年88歳になります。

この10年位、作業を手伝ってもらっています。全ての作業に参加しているわけではありませんが、田植え、稲刈りには必ず参加しています。仕事をしている私達と違って時間の制約が余り有りませんので、散歩がてらに田んぼの状態を見てくださいますの、大変助かっています。

今年の代かきの時に作業風景の写真がありますので、添付します。これから、この村上さんを中心にした田んぼの作業風景をお送りします。

よろしく、

<http://nazuna.com/tom/pct/111-20030612-05180003.jpg>

○5/30 原田からコメント：

88歳とは羨ましい先輩です。メール有り難うございました。

場所はどこらあたりですか。

私も12歳ころから田植えしていた小作百姓の子供でした。

懐かしい写真ありがとうございました。これからも私の

ホームページに欄を設けて連載します。

なんとか田んぼとネームを付けたらいかがですか。

●5/30、赤堀さん2：

お忙しいなか、早速の返信有り難うございました。

20年位前にはじめた時は、横浜・戸塚の舞岡でした。

ここには小さな丘に囲まれた谷戸があり、昭和30年代迄は田んぼだった場所が荒れて葦の原になっていました。たまたま、近くを流れる柏尾川の支流の水源を調べていた自然保護団体のかたが、そこを元の田んぼに戻そうとして開墾していた時に、仲間と参加しました。

今では、そこは立派な田んぼに戻り、横浜市が田んぼがある公園として管理し

ています。

私達は中年男性 10 名位（全員サラリーマン）が核になり、家族や近所の子供達と一緒にその作業をしていましたが、中年男性が 10 名と云うと少々目立ち、たまたまそこに来ていた横浜市の農政局のかたが、それだけの人手があるのなら、人手がなくて休耕田になっている田んぼを手伝ってはどうかと云う話があり、3 年前から戸塚の隣の泉区にあります田んぼの手伝いを地元の農家の方の指導を受けながら行っています。

ここにも横浜市が管理する公園（天王の森公園）があり、里山を維持管理する市民グループの活動があり、その活動の一つとなっています。

今回添付した写真は今年の田植えの風景です。周りの田んぼは農家の方々の田んぼですので、機械を使っていますが私達は手植えです。

周りの田んぼに迷惑がかからない様に米作りを楽しんでやっています。

<http://nazuna.com/tom/pct/111-20030612-06090017.jpg>

●6/4、赤堀さん 3 :

先日の日曜日、台風 4 号の影響が残っていた日でしたが無事に田植えを行いました。

村上さんは苗代から苗を採る作業を丹念に行っていました。1 週間前には水が充分にあった苗代が、水がなくなり少し乾いていたために苗を採るのに手間がかかったからです。

この日は私の会社にマレーシアやインドから来ている技術者も参加しましたが、村上さんも手振りで作業の指示をしていました。

添付の写真は、苗代で苗を取っている村上さんと、田植えに参加した子供やマレーシア人に田植えのやり方を教えている村上さんです。

なお、田んぼの名前は別に決めてはいませんが、天王の森公園の活動の一つですので、天王の森の田んぼと云っています。

<http://nazuna.com/tom/pct/111-20030612-06010001.jpg>

<http://nazuna.com/tom/pct/111-20030612-06010017.jpg>

○原田からコメント：赤堀さん・村上さんの「天王の森の田んぼ」の活動を私のホームページでも支援します。

-----  
●5/30 丹羽さんから、

110号の配信有り難うございました。増井さんの訃報を拝見しびっくりしました。彼の明るい元気だったころの容姿を思い浮かべ「私よりずっと若い人がなぜに逝き急ぐのか」と悲嘆の思いで一杯です。慎んでお悔やみ申し上げます。

今回も比島ルソン戦線敗走の手記『追憶の詩—苦患のルソン戦線第二部』から抜粋させていただきます。筆者は大阪府枚方市在住のお医者さんで関西あららぎ同人の坂田澤司氏（82歳）です。昭和19年7月、軍医見習士官として南下の途中、バシー海峡で遭難、10時間余漂流の後ルソン島に上陸、以降終戦まで米軍の猛攻を受けて敗走を続ける本隊と共に山奥をさまよひ、9月に捕虜収容所に収容されるまでの極限の実態を、短歌を主体に綴られています。

『空を裂き瞬時に船は没しけり数多の兵の命とともに』『母の名を重ね呼びつつ群離れ少年兵の浪に吞まれき』『兵飢えて耐えつつあるに洋酒飲み豪語しまぬ高級将校ら』『もみまじる握り飯ひとつで生きよとは早く死ねよの命かとおもう』『杖にすがりよろめく兵を無惨にもグラマン数機ねらいうちて行く』『退避する壕なく群りいざり行く傷兵ら一挙に爆砕されぬ』『掘られし跡なおも探して掘りあてし細きひげ芋に今日の命あり』『雨期なれば腐敗の早く路傍の屍悉く饑えて腹ふくらめり』『自決せる銃声聞くもにんげんの悲しみの心吾は失う』『朦朧の意識の中に父母が招き給いて死より脱せり』『自決せる手榴弾遠く聞ゆるも吾未だ生きんと強いて励ます』『歩一歩喘ぎて辿る山道に虚空をにらむ白骨の群』『塩尽きて幾月経しか一掬の塩汁旨し甘しとも思う』

坂田さんの調査によれば比島方面戦没者数（昭和33年発表）は、陸軍36万9027人（参加兵力50万3606人）、海軍10万7749人（参加兵力12万7361人）、計47万6776人（参加兵力63万0967人）となっている（なお昭和39年の訂正発表では戦没者の計は49万8600人、戦死者の比率は米軍1に対し日本軍37の割合）。最後に坂田さんは『死者は語らず。死者に代わって語るべきは、戦争の空しさであり愚かしさではないでしょうか。私達生還者は、生ある限りこのことを後世に語り継ぐべき使命をもちます。』と言っておられます。

-----  
●6/1 レモングラスさんから、

鈴木 M さんからの、家庭の野菜クズの堆肥化についてのお話にも、参考になればとお知らせします。

わたしは、マンションでもできる、手軽な手作りコンポストの作り方を教わり実行しています。コンポスターなど市販のものは使わず、小さく切り、乾燥させた生ゴミに落ち葉、米ぬか、苦土石灰、そして”タネ”となるコンポスト（土の中の微生物が豊富）などを混ぜ、ダンボール箱で寝かせて作ります。ちょっとしたコツがあります。

興味がおありでしたら、私たちの会で作成した冊子がありますので、お送りします（500 円）。微生物の働きで生ゴミが栄養豊かなふわふわな土のような感じになる過程は楽しいですよ。

-----  
●6/4 大山さんから：レモングラスさんへ、

レモングラスさんに答えて、大山勝夫より：

世界の人口増と食糧難、その解決に期待される遺伝子組み換え食物、お説のとおり。しかしその前に、いま先進国では飽食の時代、開発途上国では飢餓に苦しんでいる。つまり食料の適切な分配に問題があるのではないのでしょうか。次に、世界の農業が一国の大企業に支配されてよいかという心配があります。いまや遺伝子組み換え作物を生産する特許を一国が握るという懸念があります。私自身、かつてはこの分野の仕事に従事したものとして感じております。科学技術の成果は世界のあらゆる人々が等しく享受すべきです。もうひとつ研究者が威張っているというお説、謙虚に受けとめたいと思います。とくに最近の若い研究者に聞かせたいところです。その昔大学の研究室でノミのキンタマの研究をやっていて日露戦争を知らなかったという話を聞いたことがあります。先端技術に携わる若い研究者はレモングラスさんのような意見を謙虚に聞いて、社会の問題に関心をもつ必要があります。

○原田からコメント：

いそがしいところメール有り難うございました。

遺伝子組み換え問題は多くの読者の関心事です。

ぜひ、続いて寄稿して下さい。

「農政と共済」の記事の転用でも結構です。

ぜひ、お願いします。

-----

●6/5 栗田さんから、

「十割そば」の体験談をお届けします。

もっと多くの人に、この楽しさを覚えてほしいと思います。

○原田からコメント：

メール有り難うございました。不幸なこと続きで滅入って

いたところに、楽しい話で元気を頂きました。

-----

●6/7 高橋Mさんから：新読者です

「電子耕」110号から読者になりました。よろしく願いいたします。私より10歳も上の方がやっているのにビックリし、脱帽です。最近自分でも年寄りだと思ふことが多かったのですが、これからはもう少し元気を出してやらねばという気になりました。ありがとうございます。

農業・食・自然環境といった問題については私も若い頃から関心を持ってきましたので、まだメルマガの様子がわからないところもありますがこれからの「電子耕」も楽しみに読ませていただきます。

30年近く前から千葉県三芳村の無農薬農業グループの野菜を食べ、娘が小さいときから村に出かけてはいろいろな体験をしてきました。ちょうど『現代農業』の方の取材とぶつかり写真が雑誌に載ったことがありました。今は、その娘が子供をつれて三芳村に時々行っています。

また私が稲城市の市史の編さんに参加したときには農文協の図書館を何回か利用させてもらいました。今度「電子耕」の読者になったのも何かの縁かと思えます。『アサヒタウンズ』で知りました。

私のホームページは旅のエッセイが主ですが論文も読めるようになっています。よろしかったらご覧下さい。

<http://www1.ocn.ne.jp/~rakutei/>

○原田からコメント：

初めまして、ホームページ拝見。駒込動坂ゆかりの方は2人目です。  
昭和17から24年ごろ駒込病院の前を入った368番地に叔父の  
家があり、学生時代から居候をしていました。  
懐かしい思いがいっぱいです。  
いろいろメール有り難うございました。  
今後どうぞよろしくお願いします。

-----

●6/7 長谷川さんから：反戦・平和の詩

こんにちわ、長谷川です。電子耕いつも楽しみに読ませていただいています。  
8月6日の「桜隊原爆忌の会」に向けて準備に忙しくしています。  
そんななか事務局長で詩人の近野が「反戦詩集」のホームページで広島で亡く  
なった、桜隊員園井恵子の甥に当たる原田勇男さんの詩「叔母への手紙」を發  
見しました。少し長いですが是非読んでください。

叔母への手紙/原田勇男/あなたが育った北国でも/雪解け水の岸辺で草木が芽  
吹いています/北緯四〇度線上の小さな庭が見えますか/岩手町旧川口村の「働  
く婦人の家」/あなたの可憐なブロンズ像にも/岩手山から早春の風が降りてき  
ます/ 広島を襲った一閃の光と爆風/人類史上最悪の殺人兵器が/民衆のいの  
ちを焼き尽くしました/映画の中でしか会うことのない/私の親愛なる叔母さん  
も/原爆で被災した死者たちの一人でした/ あなたの芸名は園井恵子/映画  
『無法松の一生』で日本人の心の妻を演じた新進女優/広島で被爆し全員が散  
った/移動劇団「桜隊」の一員/私の母の腹違いの妹でした/ また忌まわしい  
戦争が始まりました/広島、長崎に原爆を投下したあのアメリカが/イラクを理  
由もなく侵略しています/死傷する子どもたちの破壊された未来/またも繰り返  
される民衆の犠牲/原爆で女優生命を絶たれた叔母さん/天上からおろかな人類  
を叱ってください/ 一人ひとりのいのちを/奪う権利はだれにもないのです/  
ひととひとが殺し合うことに/どんな意味も理由も存在しない/ヒロシマ ナガ  
サキ アウシュビッツ/この血塗られた地名の悲劇と悪夢を/これ以上繰り返し  
てはならない/同じ過ちを犯してはならない/今わたしたちは選びます/戦争反  
対の意思を世界に示すことを/死者たちのかけがえのない犠牲に/怒りと鎮魂の  
祈りを込めて/この比類ない水惑星で生きる/すべてのいのちのために (著作  
権は原田勇男氏にあります)

「戦争からは平和も幸せも生まれてこない」すべての戦争に反対するとの思い  
をこめて今年も目黒の五百羅漢寺で追悼会を行います。

戦争を知らない若い人たちにもぜひ参加してほしいと願っています。

やっと「桜隊原爆忌の会」のホームページを公開することが出来ました。

詳しくは是非ホームページをご覧ください。

URL <http://www.h6.dion.ne.jp/~skr-tai/>

「夢のかけら」 URL

<http://www.h3.dion.ne.jp/~nanchan/>

「桜隊」 URL

<http://www.h6.dion.ne.jp/~skr-tai/>

○原田からコメント：6月6日国会では有事3法が成立しましたね。残念なことは国民の十分な議論ぬきで、国民の経済・生活が制約を受けることです。これからも反戦・平和の闘いを続ける必要があると思います。

-----

●6/8 斎藤さんから：

お元気ですか。

どういう訳か今年はカッコ-の声は聴こえず、ホトトギスの声のみ響きます。

野生の栗の花が満開となり、桑の実が黒く熟しとても美味しいです。

斎藤 富士雄

---

<舌耕のネタ> 「北朝鮮の工作船と食料自給を考える」

---

北朝鮮の工作船が自爆・沈没から引き揚げられて、東京・お台場で公開されている。その経過と船体内部をテレビで見た。新聞でもくわしく報道された。それによると遺留品の携帯電話に麻薬密売の取引だったのか日本の暴力団との通信記録が残っていた。私が気になったのは遺留物に山形県のメーカーの「赤飯」「とりめし」の缶詰があったことである。日本の米加工品に頼っていた工員たちの自爆が哀れである。

自国で食料が自給できずに飢餓に迫られた人民は、「窮鼠猫を噛む」のたとえ通り核兵器や麻薬の密輸によって軍事力を強化し、果ては若者が自爆して国に忠誠をつくすという最悪の事態になっていることを示している。

思い出すのは60年前の日本敗戦のころ、特別攻撃隊で敵艦に自爆攻撃をか

けた先輩・戦友たちのことである。形は異なるが祖国防衛のため身を挺して尽忠報国を誓った若者の姿があった。

国が滅びるということは、指導者が軍事力だけに頼り、国内の食糧自給を忘れた政治だったからではないか。かつて日本軍部が農村の人口増加と貧窮を解決するために中国北部の満州を侵略し、満州事変を起こしたことによく似ている。国内で出来る矛盾を解決せず、外国に進出した。それが日中戦争になり太平洋戦争になって多くの犠牲者を出し国を滅ぼした。

北朝鮮は冷害など悪条件の中でも出来る食料が作れる筈だ。寒冷地にできるヒエ、アワ、トウモロコシ、馬鈴薯、甘藷などどうして作らないのか。米だけにこだわるから、飢えて仕舞うのではないか。国内の矛盾を解決せず、人民の目を外に向け麻薬・ミサイル部品の密輸、拉致問題など国家的無法犯罪を続けているのは許されないことである。

すべて、政治家が間違っている。軍事力に頼る国はやがて滅びる。イラクのフセインしかり、北朝鮮の金正日しかり。やがてアメリカや日本も同じ轍を踏むのではないか。

すでに我国は6月6日有事3法が成立した。戦時下の国民生活と経済は官僚統制の下におかれ、統制の権限は政府に委任された国家総動員法の再現である。われわれの監視が必要になった。

---

<元気な農業・元気なくらし・5私にもできた「十割そば」 栗田庄一  
6/5

---

●元気な農業・元気なくらし (5)

私にもできた手打ち「十割そば」

このシリーズ (4) でご紹介したベストセラー本「誰でも打てる十割そば」  
(大久保裕弘著・農文協刊 1100円)。

<http://www.ruralnet.or.jp/books/2002/54002190.htm>

「家庭でお年寄りや女性が楽に失敗なく十割そばを打てる革命的そば打ち法」

というフレコミですから、発行元の一員としては、やるっきゃない。

著者の大久保さんには、4月27日の東京国際ブックフェアの農文協ブースで開いた体験教室でそば打ちの実演をしていただき、それをすぐ傍で拝見できたこともあって、その場で「そば切り用の包丁」（特価6000円）を思い切って購入。

それに、大久保さん特製の「水回し棒」（1000円）も購入。俺もやったるぞと決意を固める。

あとは、そばを伸ばす板、伸ばし棒、そば切り用の板と包丁の支え板。

これらの道具用の材料を、自宅近くのホームセンターで仕入れて、日曜日に手作り。伸ばし板は、30センチ×60センチの合板。伸ばし棒は、直径3センチ、長さ95センチの丸い木の棒を半分に切って、45センチの棒を2本用意。あと必要なのは、水回し用の容器（透明ポリの鍋状の漬物容器を購入）。台所用のハカリ。

大久保式のそば打ちは、家庭での2人の1食分（そば粉200グラム）を誰でも打てるようにコンパクトにシステム化したのが、革命たるゆえん。

道具がそろえば、あとはやるだけ。半信半疑のカミサンと自分のために、200グラムを打って見ることにする。そば粉はあらかじめ大久保さんから1キロ（1000円）仕入れてあった。それに「打ち粉」を250グラム。この打ち粉は「更科粉」といわれる白いそば粉。これも大久保さんから仕入れた。

処女作はまずまず。カミサンにも、予想以上の味だったらしい。「半疑」は解消できた。

水回し棒による水回し（そば粉に水をなじませ、かたまりにする）はうまくいった。

確かにこの段階までは、そば粉が手に触れないでいい。

肝心かなめは、粉と水の割合を厳密に量ること。粉200グラムに水100グラムを正しく計量する。容器（なるべく底に薄く入るよう大きさを配慮）のなかに入れたそば粉に水（常温）を一度に入れてしまい、あとは水回し棒でゆっくりかき混ぜていくと次第に水と粉がなじんで、小さいかたまりができ、粉っぽさが消えて大きくまとまっていく。

ここまでくれば70%は成功。

このあと、私のばあいは、そのまま透明容器のなかでこね・ねりの作業を手でやる。

あとは、伸ばし作業。これにてこずりながら、切りの段階へ。

初めて使うそば切り包丁。もっと細く切ればよかったが、初回は少し太めの田舎そば風。

ゆでる作業はカミサンにまかせ、手作りのそばつゆとてんぷらも用意してもらって、いざ試食タイム。

「おいしい。これなら、人を呼べる」とのご託宣。そうだろう、なにしろそば粉100%なのだ。これまではどんな料理をつくっても（たいしてレパートリーはないけど）、へたくそという評価。それが一気に株を上げた。

翌週こんどは娘夫婦と2歳半の孫を呼んだ。大汗かいて、200グラムを3回打つ。

こんどもざるそばにてんぷらを添えて。もともとそば好きという2歳半の男の子がもりもり食べる。処女作よりは細い仕上がり。食感は最高。

自分が打ったそばを、みんなが喜んで食べてくれる。気分は最高。発泡酒の缶がどんどん空に。

私でも道具を手作りでき、100%つなぎなしで打てたのだから、これは「誰でも打てる」といってよい。

1キロのそば粉がなくなって、近くでそば粉を売っているところはないかと考えたら、隣町・沼南町の「道の駅」の直売所を思い出した。行ってみたら北海道産というそば粉が500グラム500円で売っていた。これを2袋購入。相変わらずここの直売所はすごい人気。野菜中心の品揃えも豊富で選ぶのが楽しい。野菜を売り場に追加する農家の表情も自信に満ちた明るさだ。まちがいなく軌道に乗っている。

この大久保式十割そばの手打ち法を、もっと広めたい。

とくに農家に覚えてほしい。自分で美味しく打てれば、畑があるのだからそばを植えたくなる。都市近郊でも、宅地用にあいた農地にそばをもっと増やしたい。

もちろん市民の間にも。かならず国産のそば粉がほしくなる。食料の自給率は、こうした大衆的加工法があって上がっていくのである。

あなたにもおすすめしたい。まずは、本をお読みください。

『誰でも打てる十割そば』

<http://www.ruralnet.or.jp/books/2002/54002190.htm>

<http://rural-2.ruralnet.or.jp/cgi-bin/isbn.cgi?isbn=ISBN4-540-02190-7>

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=02058608>

\*\*\*\*\*

(社) 農山漁村文化協会 提携事業センター 栗田 庄一

〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1

TEL.03-3585-1144 FAX.03-3585-6466

[kurita@mail.ruralnet.or.jp](mailto:kurita@mail.ruralnet.or.jp)

<http://www.ruralnet.or.jp/>

---

<農文協図書館から>高橋富弥さんの業績を讃える 原田 勉

<http://nazuna.com/tom/030528takahashi-tomiya.html>

---

2003（平成15）年5月28日、急性くも膜下出血で急逝された高橋富弥さん（享年68歳）は農文協図書館にとって貴重な業績を遺されました。その業績を讃え、ここに謹んでご冥福をお祈り致します。

高橋富弥さんは、昭和10年東京に生まれ、戦時中は群馬県桐生市に疎開し、戦後は伊勢崎市で育ちましたが、少年時代から脊椎カリエスに侵され、あたら青春を闘病についやし、県立桐生高校は卒業しましたが大学進学は諦めざるを得ませんでした。病気回復後も足腰に重い障害が残りましたが、手に職をと時計店、眼鏡店に勤め、持ち前のサービス精神でお客様に接し良心的と皆様から人気がありました。

定年後、一念発起して調布市の市民学習講座でパソコンを習いました。その技術を生かして農文協図書館にボランティアとして図書のデータ入力を始めたのが64歳の夏でした。毎週3日間アルバイトとして通勤し、膨大な量の図書を1点ずつバーコードを貼り「登録番号・分類記号・書名・著者・出版社・発行年・注記」のデータ入力をこつこつと続けました。

高齢になってからのパソコンでデータ入力という新しい仕事で、難しい旧漢字や英文・ドイツ語などに当たっても辞書を引き、勉強しながら作業を続けてきました。休み時間にはインターネットで桐生市や群馬県の各地のネットサーフィンを楽しみ、大学で学べなかったことを人生の最終段階で果たし、それが生き甲斐になっているようでした。

こうして、4年間に入力したデータは2万3000冊、農文協図書館の閉架式個人文庫の64%に当たる分を仕上げたこととなります。この殆どはホームページで公開され、世界中の利用者に活用され、農文協図書館の利用率を高めるのに貢献しています。

高橋さんは、幾多の障害と病気を抱えながらも定年後をいかに生きるかを身を持って示して下さいました。ここに農文協図書館の同僚としてお礼を申し上げます。

高橋富弥さん追悼ページ

<http://nazuna.com/tom/030528takahashi-tomiya.html>

---

<丹羽敏明の戦争体験> 11、クルアンの検問からシンガポールへ

6/1

---

昭和20年11月、英軍検問所があるクルアンの作業隊に配属された。作業は採石場でハッパをかける班、崩壊した石を適当な大きさにハンマーで割る班、その石をトラックまでモッコで運び積載する班に分かれて仕事をする。単純作業であるが、炎天下での作業はかなりきついし、危険も伴うので気は許せない。事実、けが人が出たこともあったそうだ。トラックの運転手はインド兵で、噛みタバコで口中を真っ赤にし、日陰で私たちの作業を眺めている。彼らも命令されて仕事をしているので、こちらが怠けていてもうるさく言わないのが助かるが、石の粉がかかるので作業が終わるころは体中真っ白になる。口の中にも粉が入ってうがいをしても口の中がジャリジャリしている。そんな作業を幾日か続けるうち、いよいよ検問のお呼びがかかった。

検問所は大きなテントの中に設えてあった。長い机に向かって英軍将校が3人座っている。一人は日系人らしい。こちらは5人一列に並び質問に答える形。日系人将校がたどたどしいがはっきりした日本語で質問する。こちらの部隊名

は分かっているらしく、官姓名と仕事の内容だけを聞かれる。私は経理部所属だが暗号書の持ち出し責任者になっていたのが気がかりだったが、そこまで詳しい資料は持ち合わせていないらしく、「経理の仕事をしていました」と答えてパスした。彼らが一番問題視していたのは英軍の捕虜を使っていたかどうかだったようだ。しかし私たちが駐留していたスンガイパタニーには英軍の捕虜はいなかったからその点は安心だった。わが中隊は全員無事通過しホッとした。正直なところすごく緊張していたのでパスしたときは疲れがどっと出た感じだった。検問所の近くには白・灰・黒色のキャンプが多数並んでいた。白色は無罪者、灰色は再調べを要する者、黒色は戦犯容疑者を収容するキャンプで通称ブラックキャンプといていた。ブラックキャンプにはまだ誰も入っていなかったが、後にシンガポール駐在の第七方面軍野戦自動車廠約800名が収容され、英軍捕虜を使っていたかどでチャンギー刑務所に送られ、過酷な獄中生活を強いられたことを知った。

私たちはクルアンを出てシンガポールへ向かったが、シンガポールへ到着するまでに2箇所ほど他部隊に配属され、それぞれ1か月ほどを過ごし、シンガポールへ着いたのは昭和21年2月だった。マレー半島、スマトラ島のほとんどの部隊はシンガポール沖の「レンバン島」という無人島に集められ、ここを設営地として開拓し帰還船がくるのを待機することになる。そして一部の日本兵（約4万5千人）がシンガポール市内に設けられた10余箇所の英軍捕虜収容所に分散抑留され、強制労働に従事する羽目になるのである。

---

<日本たまご事情> 「ホトトギスが鳴く」 愛鶏園・斎藤富士雄

5/8

---

私の住んでいる櫛挽ヶ原に今年もホトトギスがやってきた、姿は新緑に隠れて見えにくい鳴き声でそれとわかる。

人間様にとっては季節を告げる知らせとなるが、防風林の木陰でたまごを抱いているウグイスたちにとってそれは悪魔の声と聴こえるだろう、ご存知のごとくウグイスの巣に托卵され孵化したホトトギスの雛はやがてウグイスの卵を巣の外に押し出してしまふ、自然は残酷でもある。

ちょっと違うがこれと似たようなことが、私等のたまご業界にもある。折角永年の努力が実って安定していた卵の販売先を、突如業界のホトトギスがやって

きて、そこにあった卵を押しつけ自分の卵が居座ってしまう、商売の摂理とはいえ厳しいものである。

自然淘汰に耐えて生き残った者たちが業界を支えていくのは、いずれの世界でも同じことだが、どうもあのけたたましいホトトギスの鳴き声は好きになれない。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp>

---

<森 清の読後感>女性と仕事4、松岡やより「愛と怒り 闘う勇氣」

岩波書店、2003年4月刊、1800円+税

6/9

---

松井やより『愛と怒り 闘う勇氣』岩波書店、2003年4月刊、1800円+税

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=03022175>

「女性と仕事 (4)」ジャーナリストと市民を生きて

「愛と怒り」で駆け抜けた68年と8ヶ月だった。朝日新聞を拠点にジャーナリストとして活躍し、60歳で定年後はほぼ8年をNGOなどで市民として世界を駆けた。

ともにキリスト教の牧師である95歳と96歳の両親に先立った。父母は、神学生で愛し合い、今でいうできちゃった婚をした人たちである。一途などころは親譲りか。

「せめてあと10年ぐらひは生きたかった」と知友に書き送ったのが2002年10月で、その年の12月27日に逝ってしまった。同じ頃に逝った毎日新聞の佐藤健記者に比すれば、まだ仕事はしたといえる。それでも、残念ではあったろう。ことに、「女たちの戦争と平和資料館」を建設しようとしてその始めに倒れたのだから無念であったろうと察せられる。

9・11以後のブッシュ大統領は、「グローバル・ミリタリズム」を走っていると糾弾した。そうして日本は、「戦争のできる国家」から「参戦国家」に変わったと厳しく吐き捨てた。ブッシュや小泉も問題ながら、その潮流に抵抗できない市民にも問題があるとして、怒りながら去っていった。

日本女性は考えるけれども行動はしない、それが大きな課題だとして、行動す

る女性を育てようと種々のプログラムを組み、先に立った。しかし、まだまだ市民としての戦闘は始まったばかりだった。

1961年4月に朝日新聞社に「ただ一人」の女性記者として入社し、高度成長の影である消費者問題、公害問題を追跡して「魔女記者」と呼ばれ、70年から71年に環境問題取材のためにわたったアメリカで戦う女性運動に触れ、その関連記事を書いて「ウーマン・リブ記者」と命名された。帰国してしばらくするとキーセン（姘生）観光問題を社会問題として取り上げ、「売春」に対して春を買う男を問題にしようと「買春」なる語を作ってその非を訴えた。しかし、それで「買春記者」といわれて仕事がしづらくなる。

北京で特派員を1年あまりしてやがて81年からシンガポール・アジア総局に勤務する。それで本格的なアジア開眼、NGO開眼をし、84年11月2日夕刊に初の「慰安婦問題」記事を書き、90年代を通して熱心に書き続け、ライフワークとなった。

松井さんは、朝日新聞に定年まで居続けた理由として、たとえ短い記事しか書けなくとも、大量の読者を持つ朝日新聞に書くことで社会的な強いアピールができることを挙げている。現実主義である。それは、取材手法が現場主義を採ることと関係している。大学生の頃に奨学金を得てアメリカに留学し、しかもその帰国途上でヨーロッパを生活費を稼ぎながら旅して見聞を深めたその生活スタイルもまた現実主義と現場主義に立つ。

ジャーナリストとして生きたけれども、あるいは政治家になっていれば高い実績をあげたかもしれない。それだけの交渉力、戦略性を合わせ持ち、戦う場と機会づくりでは抜群の力を発揮した。2000年12月に東京で開いた「女性国際戦犯法廷」がその証だ。翌年12月にオランダのハーグで最終判決を出した。それも松井さんの努力あってのことらしい。

本書の最終章は、「21世紀をどう生きるか」である。第一に女性が力をつけること。第二には三つの自立、経済的、精神的、性的自立を果たすこと。第三が人と人とのつらなりを大切に、第四がオルタナティブな未来を創る力を持つこと、そして第五が本当のフェミニストを目指すこと。それらを生きる目標としている。全て女性に対してのメッセージではあるが、男性への宣言と受け取っていい。

人間への愛、それゆえの怒り、それを行動に移して実践する闘う勇氣。それが松井さんの生涯を賭けてのメッセージである。著者に代わって本書をまとめた人々は、その思いを題名にした。

まっすぐに生きた人の本を「女性と仕事」シリーズの終わりに読めたことを祝いたい。

森 清

<http://homepage2.nifty.com/morikiyoshi/>

---

<私の近況報告> 5月28日～6月10日 (中国SARS支援)

---

5月28日、農文協図書館に出勤中、アルバイトの高橋（私の妻の弟）さんの急逝の報に接し、病院に駆けつける。救急措置もむなしく13時29分死亡を確認。遺族の意志により通夜・葬儀は家族・友人葬とすることになる。

29日、農文協・農文協図書館の定期総会。名誉会長近藤康男理事は今まで無欠席だったが、今回は体調を崩されて欠席になった。私は農文協図書館理事として出席する。

30日、図書館で高橋さんの葬儀のときに配布する写真と文書を用意する。

31日、台風の大雨の中、高橋さんのお通夜、6月1日葬儀に家族全員で参加する。

6月4日、農文協図書館に近藤康男理事長がタクシーで出勤になる。自宅で閉じ込もってばかりいては運動不足になるし、図書整理もしたいのどと。昼食は懐かしい「玉子うどん」を食べて、エッセイについての話し合いをしてお昼寝15分。その後、雨になったのでタクシーでお帰りになる。

6日、東京農工大学日中友好会は中国のSARS発生について「お見舞い」を贈ることになり、本山下田会長と松村進さんが中国大使館を訪問したと知らせがあった。これはN名誉会長からのお見舞いに何か送りたいという発議から始まったが、会員有志の募金と合わせて30万円を託した。これに対して武大偉駐日大使からは次の感謝状が届いたという報告である。

「この度は中国政府と人民がSARSと闘っている最中、貴友好会より心のこもった支援金を寄付していただきましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。皆様の暖かいご厚意は必ず中国のSARS撲滅に寄与されるものと確信します」

Nさんはいつもわれわれの日中友好活動を支援してくださる篤志家であるが、なかなか普通の人には出来ないことと感謝するばかりである。

6月6日、有事3法成立。前の戦時中の1938（昭和13）年に成立した国家総動員法の再現という歴史的大事件である。これによって国民生活が制約されることになるのは前例が示している。

8日、日曜日6坪菜園で初生りのキュウリを3本収穫する。菜園で青果を作ったのは初めて、もう次のキュウリが大きくなりつつある。トマト・茄子も育っている。毎日見るのが楽しみだ。

-----  
次回 112号の締め切りは6月23日、発行は26日の予定です。  
113号は創刊（1999年）以来、満4年目の発行になります。

— P R —

■■■■ 劇団文化座 第117回公演 作 堀江安夫 演出 佐々木雄二  
■■■■ 『若夏(うりずん)に還らず』  
■■□□ ---森口豁(もりぐち・かつ)「最後の学徒兵」より---  
■□□□ 公演期間 7月14日(月)～18日(金) 会場 三百人劇場  
□□□□ 料金 一般 4200円 高校生以下 2100円(税込)  
□□□□ ★劇団他にて前売券発売中★

その他の地方の公演スケジュールは、

<http://bunkaza.com/>

森口豁「最後の学徒兵」

<http://www.cyber-rabbit.com/katsu/books/04.html>

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=96032011>

森口豁の沖縄通信

<http://www.cyber-rabbit.com/katsu/>

2001年初演時情報

<http://bunkaza.com/play/urizun/200101.html>

— P R —

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書くこと。読みたくなる見出しを簡潔・明瞭に。

- 「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的にズバリと書き出す。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めの方に書く。
  - 3、1回1テーマ、書き出し・本文・結論を10行位にまとめる。
  - 4、送信する前に、何を言わんとするか、読み返し、推敲することが大切。
  - 5、ホームページを持っている人は、文末にURLをつける。
  - 6、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックをする。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。htmlメールもご遠慮ください。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：本体700円+税 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/10.html>

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』」 第111号

バックナンバー・購読申し込み/解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

2003.6.12（木）発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

<mailto:tom@nazuna.com>

\*\*\*発行部数 1817 部 \*\*\*\*\*ここまで『電子耕』\*\*\*\*\*